

現場訪問

JICA 青年海外協力隊

海外へ赴任する若者たちに安全運転のスキルと心構えを指導

青年海外協力隊は、国際協力の志を持った日本の若者を開発途上国に派遣し、途上国の人々とともに生活し、異なる文化・習慣に溶け込みながら現地に貢献する、JICA（独立行政法人国際協力機構）が実施している国際ボランティア事業である。長・短期派遣を合わせ、毎年1500〜1700名近くの若者が参加。アジア・アフリカ・中南米・大洋州・中近東の国々に赴き、保健衛生、教育、農林水産など、多岐にわたる分野で任務にあたる。

そのなかで、とくに村落開発普及員などの任務で活動する隊員は、交通環境の悪い農村部での任務となるため、移動はほとんど二輪車を中心にする。そのため、こうした国々に派遣される人々にとっては、二輪車の運転が必須条件。しかも多くの場合、現地ではオフロードバイクで移動することになる。

交通安全センターレインボー埼玉では、毎年数回にわたり、JICAの研修の一環として二輪車安全運転研修を実施。これから海外に赴任する若者を対象に、オフロードバイクの運転指導にあたる。4月26日、27日に開催された同研修には、7名の若者が参加。2日間にわたり、密度の濃い研修が行われて



雨でぬかるんだコースで悪路走行時の安全運転技術を身につける



参加者はバイクのメンテナンス方法についても学んだ

「参加者の多くは、赴任がきっかけで二輪免許を取得した方々です。ましてオフロードとなると、まったく経験がない方が多い。ですから、まずオフロードバイクを自分で操ってもらい、しっかりと慣れてもらうことが大切。基本からみっちり学んでもらうプログラムを組んでいます」と、指導を担当するインストラクターは話す。1日目は、発進・停止、加減速など、バイクに慣れるための基本的なトレーニング。2日目には、早朝からブレーキング、低速パランス、パイロンスラロームなどが行われた。午後からはあいにくの雨となったが、現地ではスコールでぬかるんだ悪路を走ることが多い。そのため、参加者は雨に臆することなく、悪路での走行訓練を熱心に繰り返していた。



パイロンスラロームや一本橋などの課題に取り組む参加者

「見知らぬ国での任務はたいへんですが、彼らはやがて悪路の移動にも慣れ、精神的にすこく逞しくなっています。青年海外協力隊の事業は、日本の若者が海外に貢献するだけでなく、彼ら自身が成長する場でもあるのです」と、JICA事務所の担当者は語っていた。

TOPICS

高年齢ドライバーに自分の運転を見つめ直してもらったための講座

4月12日、埼玉県警察本部が主催する「高年齢いきいき運転講座」が埼玉県自動車学校（さいたま市北区）で開催された。これは高年齢ドライバーの事故防止を目的に「いきいき運転講座」と「ホンダ健康ドライブスクール」を組み合わせた講座で、本田技研工業（株）安全運転普及本部埼玉普及ブロックと交通安全センターレインボー埼玉が協力して行われた。参加者は埼玉県内に住む高年齢ドライバー15名ずつ2つの班に分かれ、午前と午後で交互に「いき

いき運転講座」と「ホンダ健康ドライブスクール」を受講する。

「いきいき運転講座」では参加者が5名ずつグループをつくり、進行役として各グループに埼玉普及ブロックのインストラクターが1名ついた。最初は「交通脳トレ」。脳を活性化させ、交通安全教育の学習効果の向上を目的として、まちがい探いや簡単な計算問題に取り組む。そして、一時停止場所（見通しの悪い交差点）を通行するクルマを撮影したビデオを見る。止まれる標識の手前で一時停止するクルマは1台もいない。一時停止をしなかった場合、どのような危険があるかなど、参加者同士で話し合い、事故防止のためにどのような運転をすべきかを発表した。

「停止線の手前で止まらなければいけない意味を再認識できた」「出会いの頭事故を起こさないためのポイントがわかった」と参加者は感想を話した。



「高年齢いきいき運転講座」には埼玉県内に住む高年齢ドライバー30名が参加した



「いきいき運転講座」では参加者同士で活発な意見交換が行われた

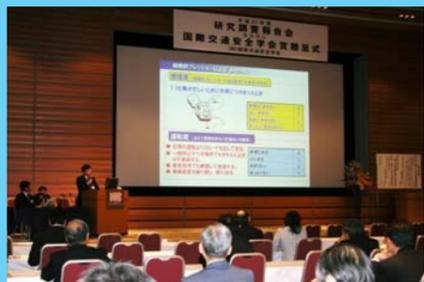
「ホンダ健康ドライブスクール」は、参加者全員に実車で自動車学校内のコースを走行してもらい、運転して



「Honda健康ドライブスクール」では実際に自分の運転している映像を見ながら、参加者とインストラクターが話し合う

NEWS REVIEW

平成21年度国際交通安全学会研究調査報告会ならびに学会賞贈呈式



4月16日、経団連会館（東京都千代田区）で、「平成21年度国際交通安全学会研究調査報告会ならびに学会賞贈呈式」が開催された。

研究調査報告会は、平成21年度に成果が明らかになった研究プロジェクトの中から①「ドライバーの感情特性と運転行動への影響～感情コントロールのための教育プログラムの開発を目指して～」②「安全・快適な都市歩行環境を支える駐車場のあり方研究」③「生活道路の総合研究」④「安全でエコなラウンドアバウトの実用展開に関する研究」の4テーマが発表された。

①では、プロジェクトリーダーである小川和久・東北工業大学教授らが「ストレス相互作用モデル」を理論的背景として運転中の感情経験に関する自己理解と対処法の学習を目的とした教育プログラムを試作。その内容と職業運転者を対象に教育を行って得た効果が報告された。

また、31回目となる国際交通安全学会賞（業績部門）は中日本高速道路（株）の「東名高速地震被災から115時間での応急復旧～駿河湾を震源とする地震災害への対応～」が受賞した。



学会賞贈呈式の様子

※1 いきいき運転講座＝一般社団法人日本自動車工業会が開発した高年齢ドライバーのための交通安全教育プログラム。4つの「交通安全トレーニング」と「交通脳トレ」を組み合わせ、効果的に安全運転能力、安全意識と脳機能を高めることができる内容となっている。詳細は以下ホームページを参照。http://www.jama.or.jp

※2 Honda健康ドライブスクール＝少数制の高年齢ドライバー用教育プログラム。自分の運転行動を客観的に振り返る自己観察法が特徴。自己観察法は東北工業大学の太田博雄教授らが（財）国際交通安全学会などで研究成果を報告している手法。自分の運転をビデオで録画して観察し、「我が身振り見て、我が振り直す」手法である。具体的には交差点通過や一時停止のあるコースを走行してもらい、その運転行動をビデオで録画し、あとでビデオを見ながらインストラクターと受講者がマンツーマンで振り返りを行う。詳細は以下ホームページを参照。http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/senior-training/